

六花

A white crane stands on a tall, thin reed in a pond at night. The background is a dark blue sky with a bright yellow full moon and several small white stars. The water in the pond is dark blue with some light reflections. There are some dark silhouettes of trees or bushes in the background. The overall mood is serene and peaceful.

俳句雑誌りつか

2014 (平成26年)

cover design Yuna Mizuno

1

か わ を る ぬ り ち と へ ほ に は ろ い
柏 輪 尾 留 ぬ 隣 ち 鳶 と へ ほ に は ろ い
手 飾 頭 守 か 人 ち の 変 本 鈍 歯 老 いろ
の に 戲 電 床 人 の 鍋 の 来 遷 家 色 歯 の 人 の
闇 に れ 年 の 混 雨 灰 正 の わ 本 鈍 衣 老 歌
に 包 る 賀 ぜ 戸 汁 月 の た し 家 色 着 お 留
ま る 島 声 の 込 練 正 月 だ し 届 色 せ ち 多
れ 育 甲 の 込 練 正 月 だ し 届 色 せ ち 多
去 ち 高 声 の 込 練 正 月 だ し 届 色 せ ち 多
年 神 据 甲 声 の 込 練 正 月 だ し 届 色 せ ち 多
今 籤 す 高 声 の 込 練 正 月 だ し 届 色 せ ち 多
年 札 鯛 高 声 の 込 練 正 月 だ し 届 色 せ ち 多

よれよれのパシユミナを巻き年賀客
た 筆筒からご宝ほうぜん前へとお年玉
れ 蓮根の穴の紅から食つむか
そ 底すこし見えて来てをり節料理
つ 鶴の絵の浮き来る杯や年の酒
ね 練り物の伊豫かまぼこやお重詰
な 波頭白く一月七日かな
ら 落書きをまづ手はじめに初硯
む 夢想だにしなき年賀の客来たる
う 午年の師であり父の初日記
み 居てくれるだけでうれしやお正月
の 能率を度外視したる賀状かな
お 追羽根をいつたん空へ預けけり
く 熊肉を食べしほてりや除夜の鐘

や 八雲 たつ 出雲の国の注連飾
ま 前髪 の ほつれし 巫女の 破魔矢 かな
け 喧嘩 纏 の 伊達 を と こ 出初式
ふ 吹奏^{ふきぞ} 初^めの 舌 な め ずり を して を り ぬ
こ 罌^あ と の 土 壁 に 初 燈 かな
え 越 後 屋 の 今 は 昔 や 福 袋
て の ひらの きれいな 人や 初恵比寿
あ 足許 の 焦げ 臭く なる どん どの かな
さ 更科 の 蕎麦 で 昼 越す 小 晦 日
き 金泉 の 太 閣 風 呂 の 初 湯 かな
ゆ 夢 解 きの 上 手 な ひ と や 獺 枕
め め だ た し や 湖 に 降る 雪 青 く
み 水^{みくまり} 分 の 水 音 し づ か 去 年 今 年
し しろ が ね の 山 を 屏 風 に 初 景 色

糸 縁 結 ぶ 神 は 遙 か ぞ 初 詣
み ひと 鞭をいれてより 飛馬ひめ 始めかな
も 餅 つ きの 筋 肉 痛 ぞ 寝 正 月
せ 遷 宮 の 檜ひ 皮わだ 匂 へ る 初 詣
ず 双 六 の 賽を息もて言ひ聞かず
ん 運 動 場 の 水 呑 み ぬ た る 初 鴉

※今年の題は「親」です。親炙という語があり親しくその人に接して感化を受けること
で「親炙に浴する」などと言います。私の周りの人・自然はすべて言葉であり教えであり
ます。「親炙」の炙とはあぶることで、暖めることです。火にあててこげ目をつける程度
に軽く焼くという意味もあり、火傷しない程度に火に近づくことだと思えます。作句もそ
ういう時期に来ている年齢でもあります。以前、当時兵庫県俳句協会長、澤井我来先生百
歳の時、ことりと二人でFM放送の番組で取材訪問したとき、我来先生のブレザーの肩が
(ストープで?) 焼け焦げていました。「うはっ!」と驚きましたが「味があるなあ」と感
銘。いつかは心頭滅却してそうなりたいと思っています。

老いてみて道面白き秋の暮

菊谷 潔

たまゆらの命長^{なが}夜^よを虫の声

晩鐘につと腰伸ばす秋涼し

散り散りに虫すがれゆき秋深し

秋の蚊を打ち据ゑにけりかくまでに

おいてみてみちおもしろきあきのくれ きくたにきよし

「秋の夕暮れ」が寂しいという句はごまんとあるが、この作品のように「老いて面白い」という前向きな言葉に意外性がある。「道面白き」には真の言霊が宿って読者の心を揺り動かす力をもっている。加齢による諦観や達観とはまったく別もの。若い頃は散歩している時、夕暮れに四季の移ろいは感じただろうが、そこまで、それ以上でもそれ以下でもなかった。しかし今になって秋の夕暮れを楽しめる境遇が訪れたというのである。「道面白き」とは現在足で歩いている道路であり、今まで歩んできた人生の道でもあるのだ。この作品に勇気をもたらす、励まされる人は多いはず。このような老い方もあるのかと……。

雪 卿 集

秋の暮

貝森

光洋

花の息地に落ちており葉は鶏けい頭とう
山国の夕日は斜めななかまど
団栗の落ちてしまえば小石の類
擦り終わり手足のきれいな秋の蠅
鳴らさねば生きられぬもの桐は実に

獅子の幕

笹村

政子

秋風を孕みては吐く獅子の幕
後退りするとき揃ふ祭獅子
担ぎ手の黄金に染まる秋の輿
突き上ぐる布団太鼓や鳥渡る
櫛紅葉重なり合うて昏かりき

雪 卿 集

渡り鳥

永田万年青

茜空影絵となりて鳥渡る
境内に糞まりの落ち来て渡り鳥
身に入むや橙色の町あかり
山間に八やっの朝霧留まりぬ
秋の夜半カーテン覗く目と合ひぬ

秋微光

松本文一郎

行く秋のとどまるところ秋微光
満月や異次元界の人となり
長き夜の野をはみ出す旅日記
新秋刀魚入歯を余し食ひにけり
とろろ汁女系家族は母の里

せつ じゆ しゆう
雪 樹 集

十三夜

升田ヤス子

初雁の茫のう然ぜんと洲に突つ立てる
渡り鳥夢前川に沿ひにけり
宵待の非ひり竜ゆうず頭ず作る具の色いろ
竹伐るや葉騷の中の男声
肩細く夫の写経や十三夜

寄せ鍋

溝渕弘志

寄鍋や箸の触れ合ふ車海老
牡丹鍋牡丹模様の皿にあり
温泉を入れて湯豆腐食べにけり
鋤焼をたつぷり玉子付けにけり
熱爛や胃に届くまで熱きまま

蛍雪譚



六甲選

俳句は詞の切れ者

二十五年十一月号選後に

夜学生屋の生徒とすれ違ふ

市川伊團次

夢風撰候補

市川さんは十二月から雪卿集同人。年も改まって意気込みを新たにしていることだろう。かといって肩に力の入った詠み方でなくて、彼の佳さは淡々と人情の機微に触れる俳句である。この夜学生もしかり。一般の生徒が放課後居残つてクラブ活動などをしていたのだろうか、下校するとき夜学生とすれ違ふ。夜学生とは昼間働いて夜学校に通う生徒のこと。すれ違つた瞬間互いの境遇を見つめ合う。昨年、映画とニュースで問題になった、親子取り違え事件を思い起こす。もしこの揚の生徒お互いが、取り違えられた家庭に育っていたらどうだったろう。そのことを想像させ、哀愁漂う秋の夕暮れなのである。人の境遇は本人の資質なのか、育つた奥境なのか深刻である。だが境遇は違つていても、人間性まで貧困でなかつたことが大いなる救いであつた。そのことを思わせてくれる作品。季語は「夜学生」。

梅檀の匂ひに気づき秋扇

「梅檀は双葉より芳し」という。双葉の出る時期は春、



それが秋になつてようやく匂いだした。といつても扇に梅檀の匂いを気づいた。もともと梅檀とは白檀のことで、香木。それを平たく削つたものを重ねて作られる扇子があるが、この形式の扇子は最近使う人が限られ、紙を貼つたものが主流という。夏場酷使している時は芳香が消えたかのようになっていたが、たまに開く秋の扇からほのかに梅檀の匂いがしたのである。今一般にセンダンと呼ばれている樹は春、紫の花をつけ、秋には黄色い実を沢山つける。川縁の土手によく見かける木。なお「梅檀は双葉より芳し」というが、「二十歳すぎればただの人」ということもあるし、大器晩成ということも。「ことわざのいい加減さ」も知ることができるが、そこは大らかに受け止めよう。物言えば唇寒しである。壁に耳あり障子に目あり、となりの客はよく柿くう客だ。私も牡蠣が無謀に好きだ。……かきちがえた。

六花集

鶉鳴くや引越の荷の少なさに
母と子のそれぞれ独居秋刀魚焼く
むくげ垣喪服の人の消えてゆく
だんじりの男とさつと目の合ひぬ
秋灯や墨の匂ひに充ちたりて

菊谷 潔

老いてみて道面白き秋の暮
たまゆらの命長夜を虫の声
晩鐘につと腰伸ばす秋涼し
散り散りに虫すがれゆき秋深し
秋の蚊を打ち据ゑにけりかくまで

住田千代子

橡の実の途切れ途切れに落ちにけり
石叩つつと一筋走りけり
椿の実ゆつたり枝を揺しぬる
散りて直ぐ流れに馴染たる柳
葉擦れさせ無花果掬いでみたりけり

平居 濤子